

Title	近世期蘭学資料における引用・卓立を示す補助符号の使用実態について：鉤括弧・傍線を中心に
Author(s)	藤本, 能史
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2021, 55, p. 59-79
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/91479">https://hdl.handle.net/11094/91479</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 近世期蘭学資料における引用・卓立を示す補助符号の使用実態について

— 鉤括弧・傍線を中心に —

藤本 能史

キーワード：蘭学資料／鉤括弧／傍線／前野蘭化

## 一 先行研究と問題の所在

補助符号は、文章をより読みやすく、また文意が伝わりやすくするために用いられる文字以外の記号の総称である。文や語句の切れ目の明示、文章の引用あるいは特殊な語句の卓立など、用途ごとに様々な符号が用いられる。近世・近代においては、引用・卓立を示す場合、主として傍線・括弧などの符号が使用されている。

これまで、引用・卓立を示す補助符号に関する研究は、近代の資料を中心に<sup>(1)</sup>行われており、近世期の資料における使用実態を報告した研究は多くない。近世期の資料についての言及は、鉤括弧・傍線を使用する早い例の指摘にとどまっている。

鉤括弧に関する研究として、大熊（一九九五）が挙げられる。大熊（一九九五）は、現代ではともに鉤括弧と呼ば

れるものの中に、二種類の別があることを認めている。外来語などの特殊な単語を括る場合や、引用・参照に用いられるものは、一八世紀頃から現代の鉤括弧に近い形状のものが見られる。一方で、会話文に用いられる鉤括弧は、開き括弧が庵点（へ）を起源として成立し、閉じ括弧は、漢文訓読において、主に段落を区切る目的で使用されていた鉤画（一）が起源であると推測し、開き括弧より遅れて成立したものであると指摘している。また、特殊な単語の卓立の役割を果たす鉤括弧の早い例として、建部清庵・杉田玄白『和蘭医事問答』（一七九五）を挙げており、このような鉤括弧の例は蘭学資料に端を発するものであると考えられるが、『和蘭医事問答』以降の蘭学資料における補助符号の使用実態については、言及がなされていない。

一方傍線については、小林（一九八二）において、外国地名・人名に傍線を付すスタイルの嚆矢が、山村昌永『増訂采覧異言』（一八〇二成立）<sup>3</sup>に遡ることができると指摘されている。

外国地名に傍線を付して、地名であることを示す表記スタイルは、山村昌永の『増訂采覧異言』までさかのぼることができそうである。その際、山村は一本傍線（—）を用い、左右に付し分けている。さらに、一本傍線を付したものは人名をも示していた。地名と人名とを区別し、地名に二本傍線（=）、人名に一本傍線を付す表記スタイルは、『音バタビヤ新聞』までさかのぼることができそうである。その場合、次のように表記されていた。

米利堅 英吉利 コロネルニール

つまり、地名・人名の右側に傍線を付すのである。この右側に傍線を付す表記スタイルが明治期の一般の表記となるようである。

小林（一九八二）一四六頁

しかし、『訂正採覧異言』以降の使用実態及び、傍線を付す表記スタイルがどのような経緯で成立したのかは明らかにされていないのが現状である。

このような状況を踏まえ、筆者は引用・卓立を示す補助符号の通時的研究に取り組んでいる。藤本(二〇二〇)では、近世前半期医学書を調査対象とし、補助符号の使用実態について調査を行った。版本に印刷される補助符号は、写本や刊本に書かれる朱引とは異なり、個人的な手控えではなく、読者に対して、文字以外にそれらがある方がよいと考えたとみることが出来る。そのため、朱引と明確に区別して調査するために、版本に調査対象を絞った。その結果、蘭方医学書では、漢字片仮名交じり文において、片仮名表記された外来語を区切る目的で鉤括弧を使用する資料が確認できたが、その嚆矢は、『蘭学階梯』(一七八八)、『和蘭医事問答』など一八世紀末頃に遡ることができると指摘した。また、『蘭学階梯』、『和蘭医事問答』以降、表記体に関係なく、蘭方医学書において外来語の卓立に鉤括弧が伝統的に使用されるようになったという仮説を得た。この仮説を立証するために、医学書以外の蘭学資料についても調査する必要がある。また、外来語に傍線を付す資料も確認できたが、類似の表記形式をもつ資料において、著者の師弟関係など、資料間に連続性・関連性が認められるかという点について言及することができなかった。この点にも注目して調査を行う必要があるだろう。

そこで本稿では、近世期蘭学資料の写本・版本を調査し、引用・卓立を示す補助符号、特に鉤括弧と傍線の使用実態の一端を明らかにする。藤本(二〇二〇)では、版本のみを調査対象としたが、本稿では写本も扱う。杉本(一九九四)において、前野蘭化の著訳書が、全て写本の状態で残されているということが指摘されている。版本に限定すると調査対象から外すことになるが、各資料の連続性・関連性を確認するためには、このような資料も調査をする必要がある。したがって、今回は写本資料も調査対象とする。書写者及び書写年代が不明である資料も多いため、成立

年代と補助符号が使用された年代が同じである可能性は低い。しかし、凡例等の記述内容に、補助符号の使用目的が明記されているものもあり、写本においては、このような情報に注目して調査を行う。

## 二 調査方法について

近世期（ここでは慶長元年（一五九六）～慶応四年（一八六八）とする）の蘭学資料を対象とし、特定の文や語句の引用・卓立の役割で鉤括弧・傍線などの符号が使用されている資料について調査を行う。主に、近世期の蘭方医学書が多数所蔵されている京都大学富士川文庫の資料を中心に扱っているが、医学書以外の資料については、早稲田学古典籍総合データベースなど、各種データベースを使用し調査を行った。

## 三 近世期蘭学資料における補助符号の使用実態

### 三・一 調査結果の概観

まずは調査結果の概要を示す。本調査において、引用・卓立の役割で、鉤括弧・傍線などの符号の使用が確認できた資料は全七九点であった。表記体毎に見ると、漢文体の資料が三一点、漢字片仮名交じり文の資料が四三点、漢字平仮名交じり文の資料が五点であった。それぞれ【表1】【表2】【表3】にまとめたが、紙幅の都合上web掲載の形式(4)を採用することをご了承願いたい。

各表を参照する限り、鉤括弧が使用されている資料が多いことが分かる。特に仮名交じり文においては、大半の資

料において鉤括弧を使用する傾向がみられる。漢文体においては合符が多く使用されている。合符は、漢文訓読の際に使用された符号の一つであり、漢字二字以上の纏まりを示し、漢字文字列の中で特定の単語を分節する役割を果たしている。<sup>5)</sup> 傍線も幾つかの資料で使用が確認できるが、単線のみ、左右単線・複線の併用など、資料によってその使用方法は区々である。また合符と傍線が併用されている資料は少ない。これは、合符を用いることで語句の纏まりが分かるため、他の記号を用いることなく、当時の読者は読解することが可能であったためであると考えられる。

以下、使用されている資料が多数確認できた鉤括弧と、資料によって使用方法が区々である傍線について、それぞれ使用状況の考察を行う。

### 三・二 鉤括弧の使用状況について

まず、鉤括弧の使用状況について確認する。大熊（一九九五）で指摘されている『和蘭医事問答』とほぼ同時期のものとしては、森島中良『紅毛雑話』（二七八七）、大槻玄沢『蘭学階梯』（二七八八）が挙げられる。

竜の蛮名「ダラーカ」。南海の中喝叭国に多く産す。其大小一ならず。大なるに至りては。三四丈に及ぶとなり。往年「トインベルゲ」といふ蛮人。 『紅毛雑話』 卷一・一二丁裏

假令ハ土ヲ「ア、ルド」ト云ヒ性ヲモ「ア、ルド」ト云フ又衣服ヲ「ケレイド」ト云ヒ「ロツク」ト云フヲ「ベケレイデン」又「ロツケン」ト首メニベヲ尾音ヲ轉スレハ物ニ纏繞スルヲ云フ 『蘭学階梯』 卷二・一二丁裏

いずれも、片仮名表記の外来語に鉤括弧を付していることが分かる。鉤括弧を使用した目的について、『紅毛雑話』

の凡例、『蘭学階梯』の例言に以下のような記述がある（傍線は筆者による）。

○此書中平假名をもて書たる中に。片假名もて書たるは紅毛語なり。猶上ミ下の文に混ぜざらんが為に。「」か  
くのごとき点を懸たり

『紅毛雑話』卷一・五丁裏

一音釋ヲ為スニ片假名ノ字ヲ合セテ記セシハ一字ニテハ彼ノ語音ニ協和シ難キカ故ナリ譬ヘハ シエス ウエ  
キユエ ヒユ 等ノ如シ又促呼スル音ハ字ノ右足ニツ字ヲ接ス譬ヘハ テレッキ レッテルト云カ如シ又上ヨリ  
直下ニ引ク音ニハ一ヲ記ス乃チ ヘーメル アールド 等ノ如シ且蘭語片假名ニテ記スルモノ上下混同セサルヤ  
ウニ「」ノ勾畫ヲ設ク

『蘭学階梯』卷一・一四丁裏～一五丁表

両者ともにオランダ語を片假名表記し、地の文との混同を防ぐために「」の符号を使用していることが分かる。  
『紅毛雑話』は漢字平假名交じり文であり、地の文との混同の可能性が低いにも関わらず、鉤括弧を使用しているこ  
とは注目に値する。<sup>(6)(7)</sup>

また、大熊（一九九五）で指摘されている、『和蘭医事問答』の鉤括弧も、同様の役割であることが以下に示す凡  
例の記述から分かる。

一和蘭語上下ニ混同セン事ヲ恐ル故ニ「」如此ノ勾畫ヲ設ク

『和蘭医事問答』卷一・九丁裏

両者の凡例を見たら分かるように、鉤括弧を示すのに「勾畫（鉤画）」という語が用いられている。鉤画は、漢文

訓読に使用される符号の呼称であり、『倭讀要領』（一七二八）において、次のように説明されている。

○段落ヲ分ルニハ、鉤畫ヲ用フ。章首ニハ「ヲ用ヒ、結末ニハ」ヲ用テ、前後ヲ隔斷ス、皆是ヲ鉤畫トイフ

『倭讀要領』卷下・三丁表<sup>(8)</sup>

鉤画は、漢文において、段落を区切る目印として使用されていたことが分かる。この鉤画の機能を応用し、漢字片仮名交じり文において、片仮名表記された外来語を区切る目的で、蘭学資料においても使用したのだと考えられる。

また、写本ではあるが、同時期の前野蘭化の著作においても、鉤括弧が使用されている。『管蠡秘言』（一七七七序）では、以下のように鉤括弧が使用されている。

其餘ハ大凡天主教ナル者諸大洲ニ遍満ス「アジア」ニ在テハ回回国ヲ以テ己カ首領トス故ニ支那コレヲ回回国ト呼フ「エウロパ」在テハ意大利亜専ラ教化ノ主タリ「エウロパ」及「アフリカ」四方ノ学士皆聚會シテ

『管蠡秘言』二〇丁表<sup>(9)</sup>

「アジア」「エウロパ」など、片仮名表記の地名に鉤括弧が付されている。しかし、「意大利亜」など漢字表記の地名には付されていない。鉤括弧はこのほか、「テウルフツプ」など片仮名表記の人名、「テレスコピウム」など片仮名表記の名詞に付されている。つまり、鉤括弧が付されるのは片仮名表記の語に限られているのである。本文は漢字片仮名交じり文であるため、恐らく『蘭学階梯』と同様に、地の文との混同を防止する目的であると考えられる。なお



蘭化は、『字学小成』（一七八五序）など、『管蠡秘言』以後の著作においても、片仮名表記の語句に鉤括弧を付す表記形式を採っている。また先述の通り、蘭化の著訳書は全て写本であるが、鉤括弧は朱引のように後から付されるのではなく、書写段階で既に付されている。しかし、今回調査した写本が蘭化の自筆ではないと見られるため、この鉤括弧は、後年の書写者によって付け足された可能性も考えられる。

ここで注目したいのは、蘭化の案出した蘭語翻訳法である。蘭化は、『和蘭訳筌』において、「蘭化亭訳文式」と呼ばれる蘭語翻訳法を掲げている。「蘭化亭訳文式」は、「原文に訓（訳字）を施して、擬似漢文の形に整え、それを日本語の語順に並べ替える」（森岡（一九九九）三七頁）翻訳法であり、その内容は以下の通りである（引用は、松村明注『和蘭訳筌』による。傍線は筆者による）。

凡ソ、翻譯ヲ為ス者、宜先線字ヲ用テ、原文ヲ謄写スベシ。次ニ、每言下訳字ヲ記ス。

如発言・助語ノ辞正訳シ難キ者ハ○圈ヲ附スベシ。（中略）如他字ヲ加テ其語意ヲ達スベキモノハ、其字ニ勾「画」ヲ設クベシ。又、如名称亦コレヲ用ユ。或ハ囲□ヲ設。次ニ甲乙等小字鈴ヲ附シテ、語路ヲ指点スベシ。末ニ切意ヲ録ス。 松村明校注『和蘭訳筌』（『洋学 上』日本思想大系六四）、一一〇～一二二頁

傍線部より、蘭化が蘭語の翻訳において、字や語句を区切る目的で鉤画を使用していたことが分かる。このことから、外来語を区切る場合においても同様に、鉤画を応用した可能性が考えられる。

森岡（一九九九）は、「蘭化亭訳文式」によって欧文を訓読する伝統が生まれ、英学の時代まで受け継がれたと指摘している。中良及び玄沢は、蘭化の影響を受けて鉤画を使用したのではないだろうか。中良の兄桂川国瑞は蘭化と

親交があったが、『紅毛雑話』の跋文を、蘭化の息子前野達が書いていることから、中良自身も蘭化の影響を受けていた可能性があると考えられる。玄沢は蘭化の門弟であり、「蘭化亭訳文式」による翻訳法を勉強したことが、『蘭訳梯航』（一八一六成立）に記されている<sup>(10)</sup>。また、『蘭学階梯』には、蘭学の手引きとなる蘭化の著作を挙げており、『和蘭訳筌』や『管蠡秘言』などが記されている。

先生著ス所ニシテ此學ノ筌蹄トナルベキ書ニハ和蘭譯文略、蘭譯筌、助語參考、蘭語隨筆、古言考、點例考、等ナリ其餘、思思未通、管蠡秘言、仁言私說、八種字考、彗星考、輿地圖編、ノ類ナリ此外天文地理及ヒ豎算測量等ノ譯稿、篇ヲナスモノ枚擧スヘカラス

『蘭学階梯』卷二・二六丁表

蘭化以前に、鉤画を応用して外来語を括った例は確認できていない。したがって、鉤画を応用して外来語を括る表記形式は、蘭化によって行われ、その影響を受けて後世の蘭学者も行うようになったのだと考えられる。

### 三・三 傍線の使用状況について

次に、傍線の使用状況について確認する。傍線については、以下の四つのパターンの用例が確認できた。

- ① 外来語に右単線
- ② 外国人名に右単線、外国地名に右複線
- ③ 外国人名に右単線、外国地名に左単線

④ 外来語以外の語句（左例におけるウマ・ヤマなど）のまとまりを示す場合に右単線・右複線

※④の例（原本では、複線は「□」となっているが、引用において「|」に改めている）

假令ハ馬ハウマノ象山ハヤマノ状水ハカハノ形湊ハ水ノ聲珊ハ玉ノ聲也又此方ニテキトイヒカ子トイフニ彼方ニ  
テハ其名ハナク叩テモクくト響ク故ニ木トイヒ

『西音発微』七丁表

①は、『外科訓蒙図彙』（一七六九）が挙げられる。藤本（二〇二〇）でも示したが、片仮名・漢字表記に関わらず、本邦版本では初めて外来語に符号を付している例である。<sup>(11)</sup>

其上ニ雞子黄ニテレメンテ井ナヲ少許合シテホツシニ浸シ付疵ノ四邊ニハ前ノ如クロザーロンヲ静ニ塗り其上ニ  
デヘンス井ブンヲ付タ、ミ

『外科訓蒙図彙』六丁裏

傍線を付す目的について、凡例で以下のように述べられている。

此書國字ヲ以テ記ス故ニ藥品錯雜シテ分別シ難シ依テ藥名毎ニ一ヲ加テ覽者ニ示ス

『外科訓蒙図彙』（一七六九）卷一・二丁裏

漢字片仮名交じり文で書かれており、地の文との区別が難しくなるため、葉名に傍線を付していることが分かる。符号を付す目的としては、先述の鉤括弧と同様であるが、付された時期は鉤括弧よりも早い。

また、『六物新志』(一七九五)、『一角纂考』(一七九五)は合刻・合本という形式で刊行されているため、本行の体裁はほぼ同じである。<sup>(13)</sup>

『六物新志』の凡例に傍線を付す目的が明記されているが、『一角纂考』においても同様の目的で付されている。(句読点、傍線は筆者による)

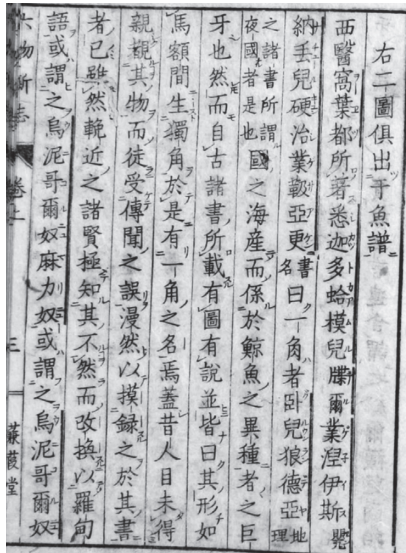


図1 『六物新志』(一七九五) 卷一・一八丁裏<sup>(14)</sup>

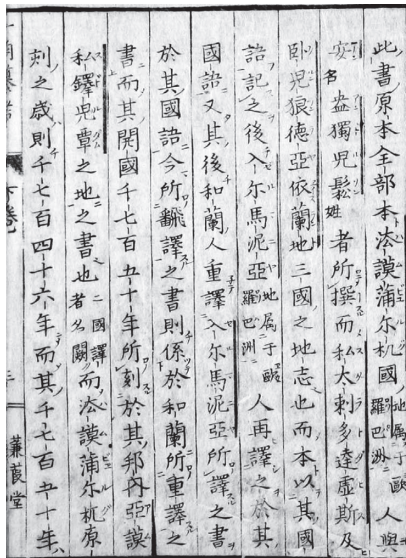


図2 『一角纂考』(一七九五) 二五丁表<sup>(15)</sup>

一諸々ノ地名其ノ漢譯有ル者ハ、皆之從フ。其ノ間訛轉有ル者モ亦タ其ノ舊ヲ革メズ。若シ之レ無ケレハ、則チ今新タニ對譯ノ法ヲ以テ其ノ呼稱ニ當テ、而シテ填ムルニ漢ノ字音ヲ以テス。且ツ旁書副墨スル者ハ、以テ誦讀

傍線を付しているのは蘭語を漢字表記したものであることが分かる。また傍線を付す目的は、語句のまとまりを示し、読む際に地の文との混同を防止するためであることも分かる。「諸々ノ地名」とあるが、地名に限らず、人名や物名にも傍線が付されている。

なおこの記述は、稿本の段階で既に見られる（図3の二～五行目）。

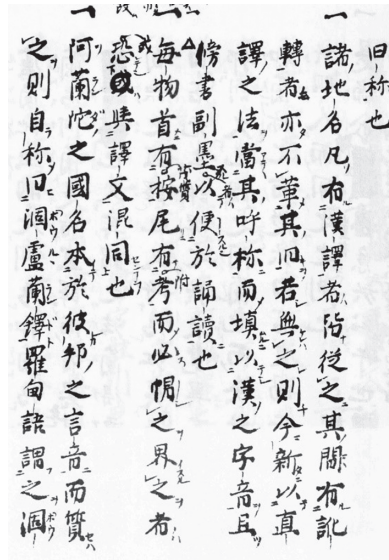


図3 『六物新志』稿本<sup>(16)</sup>

一方、『二角纂考』には、稿本においても傍線を付す目的が明記されていない。そのため、『六物新志』において玄沢が外来語に傍線を付す表記形式を採用し、両書を合本として刊行する際に、『二角纂考』も同様の表記形式に揃えた

のだと考えられる。

②は、写本では『魯西亞本紀略』（一七九三成立）、『北槎聞略』（一七九四序）において確認できた。『北槎聞略』には、傍線を付す目的が凡例において明記されている。

一 凡書中載する処蠻國地名人名器具物産等の名蠻語を以て稱する者は皆片假名をもつてこれを記す地名は雙傍抹を施し人名は單傍抹を施す

『北槎聞略』卷一・四丁裏

版本では、『遠西独度涅烏斯草木譜』（一八二一）がこのような表記形式を採った早い例である。具体的な訳出法及び、符号の付し方については、題言に以下のように示されている。

一 荷蘭之稱呼若地名人名藥名無直譯之漢字則更以其字音填入焉カバドシヨンドチウクス アヘローチ憂杞譯悉印獨度涅烏斯「亞青羅涅」之類是也從來漢人所對譯者通從焉チーアルラド業詞セツボカタテス垵爾蘭杜出職方外記依卜加得上全「亞魯厄」アロエ之類是也而地名者以雙畫傍引於字右人名以單畫傍引於字藥名者以「鉤畫」隔斷於上下而分別之其他名稱者分注於各處之下

『遠西独度涅烏斯草木譜』卷一・二四丁裏～二五丁表

題言より、オランダ語を、音訳に基づく漢字表記で示していることが分かる。また、漢人による訳のないものは、新たに訳字を作成している。そのため、訳語がどのような意味を持つのか、どこまでがひとまとまりの訳語であるのかがそのままでは読者に伝わらない可能性がある。そこで、傍線・鉤括弧を付すことで、訳語の種類及びまとまりを

標示したのだと考えられる。

『遠西独度涅烏斯草木譜』からやや時代が下るが、幕末・明治初期以降の版本において、外国地名に右複線、外国人名に右単線、その他名詞に鉤括弧が付される表記形式が一般的となった。この表記形式は、明治末期頃まで行われ、活版印刷においても同様の形式が使用されていた。

③は、小林（一九八二）で指摘されていた、『増訂采覧異言』である。注3で示した通り、外国人名に右単線、外国地名に左単線を付すことで区別している。④の、外来語以外の語句のまとまりを示す形式は、中野柳圃『西音発微』（一八二六）において確認できた（以下、用例を再掲）。

假令ハ馬ハウマノ象山ハヤマノ狀水ハカハノ形湊ハ水ノ聲珊ハ玉ノ聲也又此方ニテキトイヒカ子トイフニ彼方ニテハ其名ハナク叩テモクくト響ク故ニ木トイヒ

『西音発微』七丁表

本居宣長『漢字三音考』（二七八五）、『詞玉緒』（二七八五）などにおいても同様の符号が使用されている。関連性については、『西音発微』などの蘭語学資料と、宣長など同時代の国学者による国語学関係の資料を比較する必要があるが、この点については稿を改めたい。

傍線に関しては、資料によってその使用方法が様々であり、資料間の関連性が容易には見いだしがたい。近代に入ると、外国地名に右複線、外国人名に右単線を付す表記形式が一般的となるが、近世期においては、傍線の付し方について、共通の規則性は確立していなかったとみられる。

## 四 おわりに

本稿で述べた点は以下の通りである。

・外来語を括る鉤括弧は、『紅毛雑話』『蘭学階梯』など一八世紀後期頃から確認できるが、これらは前野蘭化の影響を受けたものであるとみられる。

・傍線に関しては、四つのパターンの用例が確認できた。使用については個別的事情が現れやすく、資料間の関連性が見いだしがたい。そのため、資料に共通の規則性は確立していなかったとみられる。

本稿では蘭学資料を中心に調査を行ったが、『西音発微』のように、同時代の国学者による国語学関係の資料と共通した用法が確認できるものもあるため、蘭語学資料・国語学関係資料それぞれの使用実態を調査し、比較する必要があるだろう。今後の課題としたい。

## 〔注〕

(1) 深澤(二〇〇四)(二〇〇六)、藤本(二〇一七)など。「引用・卓立」については、上記研究及び藤本(二〇二〇)を参照。

(2) 大熊氏は、『和蘭医事問答』の成立年を一七七三年としているが、これは清庵と玄白が書簡のやりとりを行った年であり、刊記を確認すると(筆者が確認出来たのは、京都大学富士川文庫本・東京大学総合図書館蔵本)、出版年は寛政七年(二七九五)であった。本稿においては、出版された一七九五年が、意味のある年である。

(3) 傍線を付す基準について、凡例に以下のように記されている。『蘭学採覧異言』は写本であるが、以下のような基準が記されて



いることから、傍線は、朱引とは違い読者によって記されたものではないことが分かる。

一増譯中ノ西語漢字ヲ填ル者其漢譯有既ニアル者ハ右傍ニ豎畫ヲ加フ意太里亜・入尔瑪尼亞ノ類ナリ新ニ譯字ヲ加フル者ハ左傍ニ豎畫ヲ加フ蒲郎甸・勃尔孤・雪微設兒・蘭土ノ類ナリ

『詞正採覽異言』卷一・一三三丁裏

複線については、凡例に明記されていない。また、凡例には示されていないが、片仮名表記の西洋語には鉤括弧が付されている。

- (4) 調査データは以下のウェブページに掲載した。

元URL

[https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase\\_contents/detail/724520/548ad494e660365c84b18635a0461417?r\\_rame\\_id=1340682](https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/724520/548ad494e660365c84b18635a0461417?r_rame_id=1340682)

短縮URL：<https://bitly/3gpitYR>

※表の凡例

・ 本表は、文章・語句の引用及び、外来語など特定の語句の卓立に際し、補助符号の使用が確認できた資料をまとめたものである。

・ 「書名」「著者名」は、参照先のデータによる。

・ 「刊年・書写年」についても同様であるが、個別の調査・研究などを参照し、変更した箇所もある。また写本の成立年代については、今回調査した写本に書写識語があるものがなかったため、序跋に従った。

・ 「版元」は刊記に従った。刊記がない場合、また写本の場合は「―」で示した。

- (5) 合符による分節については、藤本(二〇二〇)を参照。

- (6) 『紅毛雑話』においては、オランダ語以外にも片仮名で表記している語が見られるが、鉤括弧は付されていない。以下の例で

は、モミイには鉤括弧が付されている一方で、ミイラは片仮名表記されているものの、鉤括弧は付されていない。『紅毛雑話』では、鉤括弧を付すことで、その語句がオランダ語であることを示していることが分かる。

去によりて土人等、星移り物換りて、人も問来ぬ古墳をあばき、棺をくだきて其屍を得。交易して能價を得と也。蛮語にては「モミイ」といふ。唐土にて木乃伊と書は音訳なり。ミイラといふは日本の俗言なり。

『紅毛雑話』巻二・一四丁表〜一四丁裏

- (7) 『紅毛雑話』のように、漢字平仮名交じり文中で外国語・外来語を片仮名表記する形式は、新井白石が嚆矢であると指摘されている(松村(一九七七))。しかし、こうした表記形式は同時代において広まることはなかった。その原因は、片仮名・平仮名の表語性の有無にあると深澤(二〇一〇)で指摘されている。深澤氏は、片仮名には文字列の表語性を可視化する方法を持っていないとし、白石は音の復元を目的として片仮名表記を使用し、表語を第一義としていなかったと指摘している。一方で平仮名文字列は、表語性が連綿により可視化されていたため、片仮名表記が選択されなかったと指摘している。『紅毛雑話』の表記形式は、同時代においては特殊なものであるといえる。

- (8) 引用は、国文学研究資料館所蔵資料(請求記号:マ5-8-1-3)による。

URL: <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200004506/viewer>

- (9) 引用は、早稲田大学古典籍総合データベース収録の資料(請求記号:文庫08 C0295)による。

URL: [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_c0295/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0295/index.html)

- (10) 「蘭化亭訳文式」を学んでいたことが示されている箇所は以下の通り(引用は、松村明校注『蘭訳梯航』による)

翁ガ此学ニ入りシ中頃ハ、漸ク蘭化師ノ覃思研精ニテ、彼文章ノ中ナル点例ノコトナドモ稍開ケ、又原文ヲ抄書シテ、毎語ニ訳ヲ施シ、和法ノ廻環逆読ヲ為シ、推シテ其意義ヲ会通スル等ノ教モ起リテ、可ナリニ其所説ヲ解シ得タルナリ。コレハ、我蘭化師ノ蒙生ノ為ニ仮リニ設ケシ新例ニ出タルナリ。(中略)翁等、其ノ教ニ従ヒ勉強セシモ、僅ニ数言ヲ記セシ

マデノ事ナレバ、其文法・章法、語脈照応等ノ事ヲ学ブニモ及ズ。

松村明校注『蘭訳梯航』(『洋学 上』日本思想大系六四)、三八七頁

- (11) 管見の限り、片仮名・漢字表記に関わらず、本邦版本では初めて外来語に符号を付している例である(明和六年、皇都書肆林宗兵衛の刊記あり)。また、本居宣長『漢字三音考』(二七八五)など、国語学関連の資料においても仮名表記の語句に傍線が付される例が確認出来るが、それよりも早い。すなわち、仮名表記の語句に傍線が付された早い例でもありとみられる。(藤本(二〇二〇)五九頁)
- (12) 杉本(一九九六)によると、『一角纂考』は、『六物新志』と合本であるが、序を寄せている桂川国瑞、大槻玄沢(子煥)の言葉にもみえるように「たとえば、前者に(今聞、世肅請子煥所著之六物新志将合刻以公于世)とある―はじめから現存の合刻という形式で刊行したもの」(解題一六頁)である。京都大学富士川文庫本は、合本の状態ではないが、杉本(一九九六)解題における刊本の成立状況に従い、本稿では両本とも一七九五年刊として扱う。
- (13) 両者共、本文、有界九行、二〇字詰。(杉本(一九九六)、解題一四、一六頁)
- (14) 京都大学富士川文庫蔵、請求記号：リ/5 URL：https://rmdakulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb000007578
- (15) 京都大学富士川文庫蔵、請求記号：イ/227 URL：https://rmdakulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001081
- (16) 影印は、宗田(一九八〇)による。
- (17) 外国地名に右複線、外国人名に右単線、その他名詞に鉤括弧が施される表記形式の消長は、深澤(二〇〇六)、藤本(二〇一七)による。

〔参考文献〕

- 大熊智子(一九九五)「引用符を用いた会話文表記の成立」『日本文学』八四、東京女子大学日本文学研究会編
- 小林雅宏(一九八二)「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」『文研論集』第八号、専修大学大学院学友会編

杉本つとむ編(一九九四)『早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇第二卷 前野蘭化集』、早稲田大学出版部

杉本つとむ編(一九九六)『早稲田大学蔵資料影印叢書洋学篇第一卷 西洋本草書集』、早稲田大学出版部

宗田一解説(一九八〇)『六物新志・稿／一角纂考・稿』江戸科学古典叢書三二、恒和出版

深澤愛(二〇〇四)『外来語の片仮名表記と表記体―『太陽』前誌群による考察―』『語文』八三、大阪大学国語国文学会編

深澤愛(二〇〇六)『近代における外来語片仮名文字列の特質変化―『太陽』及び『太陽』前誌群を資料として―』『国語文字史の研究』

#### 九、和泉書院

深澤愛(二〇一〇)『西洋紀聞』における平仮名と片仮名』『語文』九二・九三、大阪大学国語国文学会編

藤本能史(二〇一七)『近代外来語の補助符号について―表記形式ごとの使用状況の比較を中心に―』『日本語学会二〇一七年度春

#### 季大会予稿集』、日本語学会

藤本能史(二〇二〇)『近世前半期版本医学書における引用・卓立を示す補助符号について』『語文』一一五、大阪大学国語国文学会編

松村明(一九七七)『新井白石と外国語・外来語の片仮名表記』『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』、明治書院

松村明・沼田次郎・佐藤昌介校注(一九七二)『洋学 上』日本思想大系六四、岩波書店

森岡健二(一九九九)『欧文訓読の研究―欧文脈の形成―』、明治書院

#### 〔参考URL〕

国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベース

[https://basel.nijl.ac.jp/info/lib/meta\\_pub/G0001401KTG](https://basel.nijl.ac.jp/info/lib/meta_pub/G0001401KTG)

国立公文書館デジタルアーカイブ

<https://www.digital.archives.go.jp/>

富士川文庫―京都大学貴重資料デジタルアーカイブ  
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/fujikawa>

早稲田大学古典籍総合データベース

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>

(大学院博士後期課程学生)

## SUMMARY

The Actual Use of Punctuation Marks that Play the Role of Quotation or  
Prominence in Modern Dutch Studies Materials:  
Focusing on Square Brackets and Sidelines

Yoshifumi FUJIMOTO

So far, research on the actual use of punctuation marks that play the role of quotation or prominence has been conducted mainly on modern materials, and references to materials in the early modern period refer to early examples of using brackets and sidelines. Staying. The notation form of foreign words with square brackets is thought to have its origins in Dutch studies materials, but the actual usage has not been clarified. Therefore, in this paper, I will research the materials of Dutch studies in the early modern period and clarify a part of the actual usage of punctuation marks that play the role of quotation or prominence, especially square brackets and sidelines.

The matters clarified in this paper are as follows.

- 1) The hook brackets that enclose foreign words can be confirmed from the latter half of the 18th century, such as *Komo-Zatsuwa* and *Rangaku-Kaitei*, but these are thought to have been influenced by Maeno Ranka.
- 2) Regarding the sidelines, we were able to confirm examples of four patterns. There are various ways to use it depending on the material, and it is difficult to find the relationship between the materials easily. It seems that a common regularity was not established in the materials regarding how to add sidelines.